

第二期 第七十二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 07. 20 定有堂書店 発行

闇の奥 奈良 敏行

太陽の異界で ワクサカソウヘイ

文学研究者による当事者研究と宮本民俗学 岩田 直樹

汽水のほとりから (16) 小原 修治

されどワシらが日々 萩原 俊郎

倉敷、美観地区、スロウな時間 松田 裕史

ヤポネシア11 芝野 浩貴

全集さまざま 世界文学の巻 ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十一 内田 克彦

八代日記 (二十八) 齊藤 仁昭

トルストイ翁の涙に… 秦阜 梅林

人のもとに帰るしかない 三浦 永理

そうめん あきの素生

…… 編集後記



闇の奥

奈良 敏行

(定有堂 店主)

定有堂書店で二一年留まることなく売れ続けている、『ふぎける力』(コア新書)という本がある。著者はワクサカソウヘイさん。鳥取と東京の二重生活をしている人だ。親しくなつて七年以上になるだろうか。プロの文筆家だが、声をかけると気軽に、『音信不通』に寄稿してくれる。親しいので当然、店内に本を置くのだが、適切な置き場を思いつかない。それで、入り口ど真ん中に、特設コーナーを作っている。コロナ禍の中で、東京に足止めされ鳥取に来られなくなつた。それで本にポップをつけ、文末に「ワクサカさんどうしてるかな?」と記した。その頃から顕著に売れるようになってきた。ワクサカさんの知人が買っているのかなと思つたが、購入者に聞くとそうでもない。タイトルが気になるという理由だった。

『闇の奥』というのはコンラッドの小説で、文明の光から遠

く離れた異郷に魔術的な力(アウラ)の存在を感じるという話だ。そんなカルト的な世界と関係ないのかも知れないが、この小説を読んでいたらふとワクサカさんのことを思い出してしまった。いつか「未来都市トットリ」という著書も構想している、と聞いたこともある。

しかし発端は、なぜか『ふぎける力』がポツポツと売れ続けていたという発見と驚きだ。

「ふぎける力」の一例としてワクサカさんは、東京とは「別に」鳥取に居住地を持ったことを挙げる。やや過疎地といえなくもない郊外だ。「二重」そして多重ということは「ふぎける力」の本質要件だ。

ワクサカさんは、「私は常に、意味のないものによって、救われてきました。だから無意味の価値を、信じています」という。この本の主張は一つ。「ふぎけるって、なんて心を楽しくしてくれるんだろう」だ。ところで定有堂は、「意味」を求める本を、並べる本屋だ。だからワクサカ本の置き場というもののはじつは存在しない。それで入り口と真ん中に、つまりどこでもない場所に置いている。神棚のようなものだ、といまこの瞬間に気がついた。

ワクサカさんは多才でコントのシナリオも書く。経験で、「構図からなにかが一瞬抜け出した時に、笑うようです」と、ヒケツを述べる。この「構図」というのは、この本の一番大

事なキーワードだ。構図にがんじがらめになって苦しむ。だから構図から抜け出すことが人生の一大事。抜け出してもすぐ再び構図が締め付けてくる。それ故たくさんの構図を持たなければならぬ。そして抜け出す手立ては「ふぎける力」。

ふぎけて生きようというテーマだったら、自己啓発本のコーナーに処を得るだろう。でもワクサカ本は少し違う。ギリギリのところで手にした、説明し切れない発見だからだ。中学生のとき歴史の先生が、授業を脱線して語った一言を、「衝撃的」な言葉としてワクサカさんは忘れない。『絶対』って言葉はな、死以外には使っちゃいけないだ」という言葉だった。「それからずっと、死の恐怖に怯えています。死にたくないんです」。つまり、「絶対」という「構図」に迫いつかれたら、生きていくことはできない、とそのとき気づいたのだ。絶対との対蹠点に「ふぎける」がある。意味を求めるその先には「無」しかない。存在の充実感とは、「無」と「無」との間、網の目上にしかないのだ。

著書の後半に至って、ワクサカさんはいう。「正直、私、疲れてきました。無意味を意味ある言葉で語ることに、ぐったりして来ました」と。

定有堂は「意味」を求める本屋だといった。「意味」とは理念と現実との相互干渉のことだ。そこに相互承認があれば

「意味のあるもの」となる。ワクサカさんは「意味のないもの」へ逃れたいという。でも「規範」から「逸脱」という非意味化(生成変化)も、いま現在は最前線に位置する意味のある営為なのだ。

先日空港に向かう直前に立ち寄ってくれたワクサカさんのまなざしの奥に、「闇の奥」を見たような気がして、こんなことを考えてみた。『ふざける力』は、闇に分け入る奥深い本なのだ。

2022. 06. 12

(参考)

ジョウゼフ・コンラッド 『闇の奥』 光文社古典新訳文庫 2009
ワクサカソウヘイ 『ふざける力』 コア新書 コアマガジン 2015

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室(会場 定有堂二階 葉香クラブ(荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

太陽の異界で

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

私は「異界」が好きだ。日常から逸脱した先にある景色、独自の生態系、特殊なコミュニケーション、そういったものに食指が動く。それはおそらく自分自身が東京都練馬区という非常に平々凡々とした地域に生まれ、中流家庭で「何者でもないまま」に育ってしまったこと、それによる不安や焦りが根源となった衝動なのだと理解しているのだが、まあ詳細を分析することは後日に譲る。

その日、大阪府は万博記念公園に私はいた。太陽の塔を見るたびに思う。「なにを考えて岡本太郎はこれを創ったんだ」と。「グラスの底に顔があつてもいいじゃないか」。そんな、常人の思考の域を軽々と越える発言をしていた岡本太郎である。稀代の「熱い人」である岡本太郎が何を考えてこの奇異なる太陽の塔を創ったかなんて、普段インターネットばかりやっている凡人の私には、知る由もない。

そんな岡本太郎と深い関わりがある、もうひとつの巨大な「異界」が、ここ万博記念公園にある。それが公園の奥にひっそりと佇む、国立民族学博物館、通称「みんなく」である。

「大阪万博開催の際、岡本太郎は太陽の塔の内部に、世界中の民族の仮面のコレクションを展示しました。万博終了後にもそれをどこかに展示できないか、という想いもあつて建てられたのが、このみんなくです」。職員さんがそう説明してくれる。黒塗の広大な建物の内部は、まさにブラックボックス。世界中の民族資料が、まるで闇鍋のごとき雑多さで、所せましと展示されている。ここはまさに、「異界」シーンの巨神。棺桶。呪いの偶像。面妖な仮面。民族学の先生たちが世界中からき集めてきた奇異なる展示物たち。スタートからいきなりモアイ像が待ち受け、アフリカの釘だらけの呪術人形が現れたかと思つたら、日本コーナーでは熊本県の祭りで使われる本物の仁王像（高さ5メートル！）が睨みを効かせている。異様なテンションの博物館だ。なんかわからないけど、荒俣宏のレム睡眠中の夢の中に迷い込んだら、きつとこんな感じだろうな。そんなことを想いながら、ふらふらと展示物のうねりの中を彷徨う。

ふと誰かに見られている気配がする。そういえば「こ

ここには妖精が出る」という噂を聞いたことがある。おそろるおそろる職員さんとその噂の真偽を尋ねると「うーん、まあ、アレですよ。世界中の神々やら精霊やらが宿っているものを持ってきているわけですから…。いや、お祓いはもちろんしていますけど。…あたしは夜になったら、館内はあまり歩きませんね」と、言葉をいい感じで濁された。完全に「察して！ニユアンスから、察して！」と言いたげなトーンである。その瞬間、真横にあった展示物から突然「ぶもおお〜！」という音が。ついに、出たのか？「ここは中東ゾーン。この展示からはラクダの鳴き声がするんです」と冷静な解説をする職員さん。よかった、出たわけではなかったようだ。吊り橋効果によって職員さんにインスタントな恋心を抱きそうになりつつ、歩を進める。

ルーミアアのコーナーに「陽気な墓」というものが展示されていた。墓を展示していることがそもそも凄いが、この墓には、死者の生前の行いがユーモアたっぷりに刻まれているのだという。「つまり『死』というものを明るく捉えようとする文化の象徴なんですな」。なるほど。私はすっかりこの「陽気な墓」が気に入ってしまった。自分も死んだら、墓に「この男は歯並びがガタガタで、博物館に行く」とすぐに職員さんに淡い恋心を抱きがちだった」とか刻んでほしい。

しかし、このみんぱく、本当にありとあらゆるものをほぼノンルールで詰め込んでいる。「韓国では中華料理のメニューになぜか洋食が」ということを言いたいがためにオムライスのサンプルを唐突に展示したり、「タイではお坊さんが前から歩いてきたら、バイクに乗っている人も一回降りて道を譲ります」ということを示すためにわざわざマネキン4体とスクーターを使ってそれを表現したり。ちよつと引くほどの情熱が、そこにある。

帰り際、公園のギフトショップに寄った。そしたら、太陽の塔を改修した時に剥がしたタイルを売っていた。本物の太陽の塔の切り身を、ばら売り。「この公園、いろいろヤバイ」と思った。

文学研究者による当事者研究と宮本民俗学

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授)

『読む会』選書人

開かれなかった一月・二月「読む会」の二冊(第七〇号参照)を読んで以来、「当事者研究」がずっと気になっている。

一九八四年に北海道で「浦河べてるの家」(「べてる」とは「神の家」の意)を創設した向谷地生良によると、当事者研究とは「統合失調症などをかかえた当事者活動や暮らしの中から生まれ育ってきたエンパワメント・アプローチ」、「当事者の生活経験の蓄積から生まれた自助―自分を助け、励まし、活かす―と自治(自己治療・自己統治)のツール」(「当事者研究ネットワーク」ホームページ)である。

私は誤解していたようだ。「研究」というからには、精神分析のように学者が患者さんの内面を何らかの方法で探り、専門用語によって症例の客観的な記述を行い、治療につながる理論を創りあげていく学問だと思っていたのだ。

五月二八日付朝日新聞書評欄「著者に会いたい」で横道誠『イスタンブールで青に溺れる―発達障害者の世界周航記』

(文藝春秋、二〇二二年四月)を知った。

横道は、今までに世界四六か国を旅した一九七九年生れのドイツ文学研究者。四〇歳で発達障害(自閉スペクトラム症と注意欠陥・多動症、発達性協調運動症の傾向あり)と診断され、現在は文学研究とともに当事者の自助グループの運営に当たっている。

他者からの断絶感、非定型な想像力、世界が泡立つ感覚、「青」への惹かれやすさ、脳内多動による朦朧感、体さばきの難しさ、解離による幻覚感覚。これらが統合され、身の周りの世界を「水の中」と感じながら日々を生きている横道の語りと、ジョン・アップダイク、ヴァージニア・ウルフ、ガルシア・マルケス、ジェイムズ・ジョイス、チェーホフ、ハイデガー、埴谷雄高、プーシキン、ブルースト、フローベールの著作からの引用が、みごとに融合し、二五都市で体験した内的世界が描かれていく。

印象的な箇所は多い。あえてタイトルとは違う二都市での心象風景を取り上げてみよう。

一週間の滞在期間で、「同一性保持」の特性のために街の中心部の同じ道を「コの字」型に三〇回も歩きとおし、昼の雑踏とは全く異なる夜のウィーンに月面世界を感じ、一〇〇年以上昔を生きたクリムトの絵に「みんな水の中」という世界観の先取権を奪われたかのような強烈な反撥、嫉妬を抱く(第一章「永劫回帰する光景 ウィーン」)。

小学校時代にカタカナで一五〇字以上にもなる正式名称を覚えたバンコクで、サリンジャーの短編『バナフィッシュユ日和』（私も大好きな作品を思い出し、美しい青い海でシビルという少女と戯れた後にホテルで拳銃自殺をする青年と四〇歳を過ぎた現在の自分が本質的に変わっていないと感じる）第二章「黄金とエメラルド バンコク」。

発達障害の内的世界は当事者でなければ感覚的にわからない。とすれば、論理的言語とは対極にある文学言語によって当事者研究を行う試みは、突飛な発想のようでありて理になつていないのではないか。

先日、何気なく定有堂書店の棚を眺めていたら、「やあ久しぶり」と古い友人に声をかけられたような気がした。声の主は『宮本常一——人間の生涯は発見の歴史であるべし』（ミネルヴァ書房、二〇二二年五月）であった。

ミレニアム前後のことになるからもう二〇年以上経つたのか。二〇世紀に現象学を熱心に学んでいた私は、その頃、「事象そのものへ」の生活世界・バーションを民俗学と見定め、柳田国男や宮本常一（一九〇七—八一）を集中的に読んでいた。柳田民俗学は安楽椅子民俗学の色彩が強いのに対し、宮本民俗学は現場主義が徹底されており、現象学的民俗学（私の勝手な命名）として魅力的であった。

本書は宮本民俗学の研究書ではなく、生涯の克明な記録である。須藤は宮本の晩年（五九歳から死去まで）をともした写真家である。彼が編集した『写真でつづる宮本常一』（未来社、二〇〇四年）と併せ読めば、宮本の人となりを詳しく知ることができると。

瀬戸内海の周防大島の農家に生まれ、三〇代になって渋沢敬三（栄一）の孫で日本銀行総裁・大蔵大臣を歴任、民俗学の最大のパトロン）の下で民俗学研究を始めた宮本は「経世済民」（よく治め人々を救う）の学をめざした。生涯に四〇〇〇日、一七万キロを歩いた宮本にとって、民俗学とは、村々の生活に入り込み、人々の主体性を引き出し、敗戦後の貧困にあえぐ生活レベルを少しでも引き上げる方策を模索する実学であった。政治家とは距離を置いていた宮本だったが、彼の知見は、例えば離島振興政策に大きく貢献した。

読む進めるうちに、突拍子もない考えが浮かんできた。宮本民俗学は現在の地点から未来を見据え、地域社会の治療の道筋を見出そうとした当事者研究ではないか。と。

当事者研究も宮本民俗学も、立場は違えども「済民」をめざしていることには変わりがないのである。

汽水のほとりから (16)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

隣県にある島根原発2号機の再稼働が決定的となった。再稼働に必要な地元同意の一連の手続きが、島根県知事の同意の表明によって完了したからだ。ここに至るまでには島根県のみならず我が鳥取県でも再稼働に反対する住民の動きがあったが、ほぼ黙殺された。例えば、米子市では市民団体が再稼働の賛否を問う住民投票条例案を市議会に提出したが、議員の反対多数で否決された。反対理由を議員に問うても、半数以上無回答だった。団体の共同代表を務めた作家の松本薫さんは「議員は市民の意見を聞くのが仕事ではないのか」と批判した、と新聞は伝えている。

十一年前に起きた福島原発事故によって、原発の安全神話は崩れたはずである。だが、それは百パーセント安全とは言えなくなっただけのことだと考える人たちは多い。彼らは新たな安全の基準を設け、着々と再稼働の準備を進め

てきた。安全神話が崩れた原因をあくまでも当時の電力会社の過失に帰し、事故は回避できたはずだと彼らは考えているのである。しかし、事故発生以前よりも厳しい新たな安全の基準を設け、これを電力会社に遵守させれば本当に安全は守れるのだろうか。思うに安全神話が崩れたということの本当の意味は、自然がもたらす事態は人間の想定を超えるということであって、そうして起こる事故は人の力では回避できないということではなればなるまい。

あの事故はああしておけば防げたという話がいまだにあるようだが、あらゆることを想定したとしても、それを超えた事態を引き起こすもの、それが自然というものだ。そのことは今まさに私たちが直面するコロナ禍について考えてみれば、よく分かるはずである。発生が予測不可能だっただけでなく、人間の叡知である科学をもつしても終息の兆しすら見えないではないか。自然は、原発事故によっても人の無力を思い知らぬ人間に、コロナ禍という新たな試練を与えたのではないかと思われるほどである。

コロナ禍も道半ばだが、原発事故についても、その終息は何をもってそう呼ぶべきか検討もつかない状況にある。十年ひと昔というが、あれから十年以上経ても、全く先が見えない。地震と津波だけなら数年後に復興できたのに、原発事故による大量の放射能のせいで人々は故郷の地を踏むこ

とさえできずにいる。コロナ禍の終息シナリオは、ヒトゲノムの何割かがウイルス由来という話もあるから、新型コロナウイルスと共生に落ち着くと考えられるが、大量の放射能との共生はあり得ない。なぜならば、それは自然由来のものではなく、人間が創造したものだからだ。

その意味において地震と津波は天災であると言えるが、原発事故は人災であった。それは、人間が為すべき対策に過失があったということではなく、原発を建設するという人間の行為自体が結果的に大量の放射能をまき散らすという取り返しのない大惨事につながったという意味に他ならない。ところが、原発事故による被災者も含め、人々が原発事故を人災であると非難するとき、人間の対策に過失があったということの方を意味している方が多いようなのである。が、それでは、再稼働を口にする者たちと同じ土俵で議論することになってしまうのではないか。

現在、原発事故の被災者としての立場から国と東京電力を相手に損害賠償訴訟を起こしている原告の数は、全国で一萬二千人余りに上るといふ。彼らが各地で起こしている集団訴訟は約30件あり、そのうち最高裁に上告していた4件について、先日統一の見解が示された。その注目の判決は、なんと国の賠償の責任は無いというものだった。当時、国は東京電力に規制権限を行使できる立場にあり、その法

的責任の有無が焦点だったが、たとえ国が規制権限を行使していたとしても、津波は試算以上に大きく、浸水による事故は避けられなかったというのが、その理由だ。

最高裁は東京電力の賠償責任については先行して有ると判決しており、14億円を上回るとされる巨額の賠償は一電力会社が単独で背負うことになった。が、この判決が事故の直後に出ていれば、この未曾有の国難とも言うべき非常事態に国の賠償責任は無いのかと大騒ぎになったに違いない。事故から十年以上が経ち、今や被災者の訴えは国民の耳に響かず、原発問題は選挙の争点にもならない。

ともあれ、国に責任は無いとする今回の最高裁判決は、被災者である原告の、国は政府の地震調査研究推進本部が公表していた地震予測の「長期評価」に基づけば津波は予測できたという主張が認められなかった結果である。が、自然は人間の想定を超えるのだから、予測可能な是非など所詮は解釈の問題だとも言える。翻弄し続ける国側の不実な態度を觀れば、損害賠償を訴えることも大事だが、被災者の方々に本当に訴えてほしいのは、そもそも原発を誘致したこと自体が間違っていたということなのである。

されどフシらが日々

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

大学時代「仮面うつ病」と診断されたことがある。

もともと、高校を一時ドロップアウトしたような人間なので、その気(け)は十分あったのだろうが、大学三年の時、どうにも後頭部が重いので大学の診療所を訪ねたら、精神科に回され、医師からそう告げられた。「まずこれを飲んで下さい」。初めて見る抗うつ剤だった。

「別にぶさぎ込んでるわけじゃないんじやけど…」。病名に納得がいかない私は、京都に来てもなかなか抜けられない岡山弁で抗弁したが、医師はこちらの目をじっと見ながら答えた。「あなた、哲学科でしょ。人生に何か目標を求めたり、理想を追い及ちなところ、ありませんか?」

◇ ◇ ◇
哲学ゼミの担任は、当時珍しかったシェリングの研究で知

られる西川富雄教授で、私が夏休みに書いたフォイエルバッハの疎外論に「なかなか面白い考察」とAを付けてくれ、「よし、哲学者を目指すのも悪くないな」などとすぐに舞い上がったものの、「大学に入ったら学生運動」と公言するおバカなサヨク学生だった私は、やがてそちらにのめり込んで、ゼミもさぼり気味になった。

それに「人生いかに生くべきか、社会はどうあるべきか」知りたくて哲学科に入ったのに、やっている勉強はカントやヘーゲルなどの哲学書の重箱の隅をつつくような研究や解釈ばかりで、少しも面白くなかった。

◇ ◇ ◇
当時、革マルや中核派は衰退し、京都の周辺の大学には「とにかく暴れるのが楽しい!」という黒ヘルのノンセクトラジカルがわずかに残存しているだけで、学生運動もたそがれ時だった。連中ははた迷惑にも代々木系Ⅱ民青の多いわが大学にしょっちゅう攻め込んでくるので、われわれ一、二回生はそのたびに「防衛隊」に回された。

彼らと同じヘルメット姿ではまずいのだろう、頭を割られないようハチマキを締め、腹にマンガ雑誌を入れて隊列を組む。つま先に鉄の入った安全靴で蹴られると涙が出るほど痛い、本当に怖いのは「竹ザオの水平撃ち」だった。飛んでくる竹ザオを右に左によけたのはいいけれど、後ろの列の

友人の目に命中し、彼は失明しかけた。

ある時は、京大の黒ヘルが鴨川を渡って来るという情報に、荒神橋のたもとの喫茶店に斥候(偵察)に出されたが、連中が店内まで押し寄せてきたので、あわててトイレの窓から逃げたこともある。

◇ ◇ ◇

「親のスネをかじってまで、なんでワシらは(藤井風もそうだが、岡山の男は自分のことを「ワシ」と呼ぶ)こんなバカバカしい『戦争ごっこ』をやっとるんじゃない」

その頃から、首筋がギシギシいうようになった。

決定的だったのが、自治会の仲間たちの裏切り。大学側が提案した「物価スライド制の学費値上げ」に、自治会はあっけなく賛成。狐につままれた思いがした(その後、自治会の委員長は大学の職員になり、とんとん拍子に出世していった。悪い予感通り、日本で二番目に学費が安かった庶民の大学は、今や関西でもっとも学費の高い大学になり、夜間学部や学生寮もなくなった)

後頭部がとんとん重くなり、診療所を訪ねたのはその後だった。「あなたが悪いわけではありません。目指す理想や目標はとりあえず横に置いて、もっと日常の小さなことに楽しみを見つけないさい」。カウンセリングで医師から勧められた。たとえば、好きな女の子の子と映画に行く、没頭でき

る趣味やスポーツを見つける…。

「そう言われてもなあ」。社会変革こそ命と思っている人間には軌道修正は大変だったが、それでも少しずつ意識して女の子とデートしたり(笑)バイクでスケッチ旅行などをしていううちに、後頭部の重さは消えていった。

◇ ◇ ◇

人生の目標や理想と同じくらい、日常のささやかな楽しみが大切であると教わったのは、その後の生き方にかかなりプラスになったように思う。社会に出ても組織の非情さや理不尽な扱いに何度も遭ったが、そのたびにこの助言を思い出した(その分、趣味もとんとん増えたが)。

男性ファッション誌『ポパイ』が部数を伸ばしていたのは、ちょうどその頃。車を持つ学生が増え、キャンパスのカフェではテニスやスキー、サーフィンが話題になった。やがて学生運動はどこか遠くの世界の話になった。

倉敷、美観地区、スロウな時間

松田 裕史

(高校教員)

五月の末、久しぶりに出張で倉敷を訪れた(正確に言えば出張ではないが、世間的には出張に見えるので出張としておく)。県外に行くのは実に一年半ぶり、しかも仕事関係となると二年半以上県外に赴いていない。倉敷には行く用もこれまでできてなかったので一〇数年ぶりとなる。ただ、前日も仕事で訪れたので倉敷で何かをしたわけではなく、今回もほとんどの時間が仕事に割かれるので割と沈んだ気持ちで車を倉敷まで走らせていた。

宿泊場所は倉敷駅のすぐ近くで、大原美術館も歩いてすぐの距離にある。残念ながら、大原美術館を楽しむ時間は全くなかったが……。五日間の滞在予定で仕事づくめの毎日だったが、三日目の夕刻、宿についてから気分転換に少し歩いてみることにした。

倉敷駅の近くには美観地区という観光エリアがある。大

原美術館を囲むように白壁土蔵がひしめいている。倉吉にも白壁土蔵群があるが、質、量ともに倉吉の二倍以上の白壁土蔵があるように見えた。宿を出る前に宿泊客用にフリーで置いてある簡易マップに目を通したが、特に行きたい場所もなかったのでマップも持たず、美観地区に踏み入った(旅先を地図も持たず、あてどなく彷徨うスタイルは沢木耕太郎の『深夜特急』から学んだ)。一七時を過ぎていたが、観光客の姿がまだ多く残っている。何となく路地を曲がった所で突如として方向感覚を失う。極度の方向音痴なのでよくあることだが、そのまま足の思うにまかせて気にせず歩く。カフェ、喫茶店、織物店、雑貨屋がズラリと並び観光客を待ち構えているが中に入る気にもならず、外から様子を窺う。備前焼を販売している店もちらほら目につく。倉敷一陽窯という店が入りやすそうだったのでそろりり中に入る。陶芸品を扱った店はこの店も一様に薄暗い。おそろく、人工の光が陶芸品の表面の色彩にできるだけ影響を与えないようにするためであろう。コーヒーカップ、フリーカップ、ぐい呑み、丸皿、一輪挿し等、様々な用途の陶芸品が置いてある。鳥取の民芸品との大きな違いは、釉薬の種類であろう。備前焼の陶芸品はどの作家であれ、割と暗くくてすんだような釉薬が使われている。作品は機能美を重視した作品もあれば、芸術品としての価値に重心を置いた作

品も散見される。このあたりのバランスも鳥取と違ふところだ。観光客がざわざわと出入りする店とは違い、倉敷一陽寮には外とは違つたスロウな時間が流れていた。しばし、備前焼を観察した後、店を出る。すぐ近くに倉敷川が流れているが、流れがあるのかどうか分らないくらい淀んでいる。深緑をたたえた幅一〇メートルほどの川も美観地区の時間を遅らせるようにスロウだった。

四日目、仕事が予定より少し早く終わったこともあり、本屋に行こうと思ひ立つ。岡山の本屋については全く無知だったのでとりあえずウエブで調べる。紀伊國屋や丸善もあるが、「スロウな本屋」という書店が目にとまる。田中を見てみるとミシマ社発行の雑誌『ちやぶ台』が紹介されている。しかも、最新刊の『ちやぶ台』には汽水空港の森さんも寄稿されているようだし、ちょうどその時読んでいた『複雑化の教育論』(内田樹)も紹介されている。興味関心が近いかもと感じ、カーナビを頼りに書店へ出発。岡山駅からは少し離れた場所にあるが、何度か行ったことのあるベネッセ本社が鎮座する大通りに近く、見覚えのある風景が目に入ってくる。店のある路地は非常に狭く、車は入れない。近くのコインパーキングに車を駐車し、歩いて店まで行く。古民家を改築した本屋に入り、土間に靴を脱ぐ。先客がちょうど購入し終わり帰宅するところだった。店主の小倉さんに挨拶をして置

敷きの店内に足を踏み入れる。いくつかパンフレットや名刺らしきものが置いてあり、そのなかに智頭のタルマリーのものがあつたことに気づく。置いてある本はスロウに時間を紡ぎだすヒントとなるよう店主が選んだものだ。絵本も多く置いてある。アーノルド・ローベルの『がまくんとかえるくん』シリーズが目立つように置いてあり、ファンの一人として嬉しくなる。大判の『がまくんとかえるくん』があり、聞くと、シリーズものを一冊にまとめた豪華版だということだった。カウンター近くに早川ユミという作家の本がいくつか置いてあり、どんな作家なのか尋ねる。布作家であるが布作品の制作を中心とした暮らしについて著作も著しているということだ。染織家で作家でもある志村ふくみのことが思い出され、若松英輔との往復書簡集『緋の舟』が記憶の底から蘇ってきた。その時、僕は左手に、若松の『愛について』という詩集を『ちやぶ台』とともに携えていた。二年前に発刊された『イワンのぼか』の新訳本の翻訳者、小宮由についても教えていただいた。三〇分に満たない滞在時間であつたが、ファストではなくスロウに思考を紡ぎだすヒントが本から、店主から提供される空間には、確かにそこにはかないスロウで豊かで芳醇な時間が流れていた。

ヤポネシア11

沖縄プロボノ記 ⑦

芝野 浩貴 (地球探検家)

八重山高校でのプロボノ(66号)の後、竹富島を歩いている時に、石垣島が離島でないことに気がついた。竹富島の3つの集落の中央に小学校と中学校が併置されていたのを見た時である。木造赤瓦民家を囲むサンゴ石灰岩の野面積みの壁と白砂海岸をブルーゲンピリアが繋ぐ。イノーで360度囲まれているので津波被害は少ないが、琉球王朝時代は米での納税だったので、西表島に渡って耕作していたらしい。(通耕)カイジ浜、コンドイ浜、西棧橋と島の西海岸を歩く時に西表島を捉えた。それから半年後、沖縄復帰50年を経た数日後には、逆に西表島から竹富島を捉えていた。

日本最西端のバス停である白浜から上原港まで歩いた時の光景の話である。途中、バイナツブルの実のようなアダン(54号)を何度も目にした。ソテツ地獄は有名だが、この島の人は飢えた時にはアダンの新芽を食べてしのいだという。観光ならば、マリウドウ、カンビレの滝や星砂の浜、仲間川マングローブを探索しただろう。水牛車で由布島に渡つただろう。更に、海部陽介チームが確認した台湾から与那国島へのグレードジャーニーを追跡したり、軍部が食糧調達のために島民の牛を略奪した黒島や口減らしのために島民を追い出しマラリアに感染

させた日本最南端(民間人が立ち寄れるという意味で、領土的には沖ノ鳥島となる)の波照間島に寄つただろう。(戦争マラリア)しかし、今回は遊歴算家としてのプロボノなので炎天下の中、散歩しただけだった。西表島小中学校の前を歩いた時には、子供たちが仮面2人哲人とシヴァア神)に近づいて手を振つた。各小中学校の児童の書いた教育標語が街角に貼られていた。(例えば、何度も諦めずに考え続けようなど)「石垣島が離島でない」というのは、八重山諸島の本島が石垣島で、本土から見た離島は、「離島の離島から見たら本島」という意味である。

八重山3高校に周辺の離島から親元離れて通っているので。前回はそのような立場の生徒の存在を忘れていたので、今回は認識を新たに石垣島を訪問した。八重山のことを、ヤイマ(八重山方言)、イーマ(沖縄方言)、ダーマ(与那国島)と地域で呼び名が違うことから沖繩を一括りにできない。那覇から八重山に来た人は「沖繩から来たんですね」と言われるが、八重山は沖繩ではないのか?と思うくらい、それぞれの地域での暮らしと文化がある。八重山民謡のやくじやーま節では、ヤクジャーマ蟹を弱者、ガザミ蟹を強者と隠喩し唄われる。生徒さんも素直で、私達が話すことを真綿のように吸収してくれる。それに輪をかけて今回のホスト校(日本最南端にある高校)のN校長は素晴らしい。地震・津波・コロナ禍に対する危機管理に日々気を揉みながら、どんなに忙しくても朝、昼休憩、放課後には全校の生徒と面談されている。「みんなの学校」の木村泰子氏を彷彿とさせる稀有な管理職である。そもそも、まればとの仮面来訪を引き受けることも一般社

会ではリスクなのかもしれないが、これまたうまく利用してリスクマネジメントされている。

遊歴算家側としての試練として、「初対面の子ともたちを前に、非日常の姿で、短時間で、何を伝えられるか？」ということがある。そこで、SHRで話すような内容の映像を、何本か予め見てもらって、講義本番は数学の内容にいきなり入ることにした。以下が今回のプロボノの内容である。

哲人講話「遊歴算家とは何か・学習の四段階・学問の3分類・人為と自然・定義と命題・結果主義・数学という規範・時間の有限性」

シヴァ神講話「旅と数学（鳥の目・虫の目・魚の目）・心と数学（心を使うな頭を使え）・部活動と数学（勝負四訓）・読書と数学（学びは人を繋ぐ）」

数学内容① ～比較でなく構造へ～

数枚の表の数字から誕生日を逆算する時に、同じものを取り出して、違うものを排除していけば集合の問題として探せるが、数が大きくなると難しくなる。構造的なアプローチとしてN進法の利用がある。

数学内容② ～大ききでなく関係へ～

ルイス・キャロルのパズルでもお馴染みの、形が同じでも図形の組み合わせ方によっては面積が異なって見えるもので、面積と比例の関係を深掘りすることになる。専門的には、カッシーニ・シムソンの定理。

数学内容③ ～形でなく不変量へ～

平面図形へのドミノの敷き詰め。当地織物の「八重山ミンサー」は5つの・と4つの・で構成する縞模様のごとく、石垣島の街中ではよく見られる模様。合わせると3×3行列の9個の・となる。いつ（5つ）のよ（4つ）までもという願いがこもっている。専門的にはポリオミノの問題へ繋がる。

3講座とも、式を使わずに、作業しながら発見する学びの時を共有した。クラスによってはいきなり腕相撲から始まった。（私が負けた）市松模様←炭治郎の緑と黒←パリティ←私の・当地鬼太郎のちゃんちゃんこの黄と黒←哲人の母神タイガーマスクの黄と黒←プロレス発の円谷企画の連想から、「シン・ウルトラマン」の解説（二項対立の権威主義から多項同体の数理的解決へのソフト・詳細は「回し蹴りの数学」の後書きのシヴァ神の眼光へ）をした後、以下の歌詞をタイガーマスクの曲で奏でてプロボノ終了した。

嘘や欺瞞が蔓延って 心病む人 あふれている

疑う力で 真理知り 生き抜く魂 身につけろ

おだ！ ヨだ！ いだ！ やえやま しょとう。

哲人とは「論理は具体的で、感性は普遍的である」とこととAI社会の病みについて語り合い、それぞれの次なる地へ向かった。

全集とさまざまな 世界文学の巻

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

海外文学は、とかく単行本や個人全集に目が行き、つい世界文学全集の類を見落としがちなのだが、これが、なかなかどうして油断ならない。

以前、昭和三、四十年代に小学館などから出ていた児童向けの世界文学全集を調べていて、そのラインナップが摩訶不思議に面妖で、ぶっ飛んでしまったことがあるが、大人向けの全集は、それ以上にお宝揃いで端倪すべからざるものがある。

古くは、昭和初期の新潮社「世界文学全集」など、今は顧みられることのない作家のラインナップが実に珍しい。ハウプトマン、メーテルランク、シヨウ、シング、スコット、ブルジエ、イプセン、ダヌンツイオ、アルツイバーシエフ、イバニエス、ズーデルマン、シンクレア、レニエ、デュアメル、バレ、クレープリンなどなど、戦前の流行状況がよく分かって興味が尽

きない。中には最近、筒井康隆が言及したことで再び目の見たケラーマンの「トンネル」も入っている。

同じく戦前の、改造社「世界大衆文学全集」や小山書店（これは戦後だが）「大衆文学全集」については、山下武が早くから指摘していた。

新人社「世界大衆文学全集」（昭和二十年代）は古書店でもうっかり見過ごしてしまいうような目立たない本だが、ゴーチエ「魔女の恋」、コリンズ「呪われた宝石」、ビアス「豹の眼」、シェリー夫人「巨人の復讐」などが入っている。

新月社の「英米名著叢書（同）はダンやミルトンを始めとする詩集やチャールサー、ラム、エマソン、エリオット、フィールディング、サッカレーなど玄人好みの作家が充実したシリーズだが、中にベックフォード（異端者ヴァセック）やレ・フアニユ（死妖姫）などが含まれ、どういいう加減で入ったものか興味深い。

筑摩書房「世界文学大系」（五十年代、ベージュ色）は、旧大系（三十年代、オレンジ色）のリニューアル版（全九一巻）だが、時代に併せて新しい所や再評価され始めた、サド、レチフ、プルースト、ムージル、セリーヌ、ベケット、ブランシヨ、ホフマンスタール、ドリュラ・ロシエルなどが投入され

た。しかし、A5判三段組はそのまま、未だに敷衍は高い。

同じ五十年代に出た講談社「世界文学全集」は、B6判の小振りながら、珍しい書目が多く、また揃いも出回らない。(その上、同社の社史の類に、只の一行も記述がないという不可解)全一〇三巻、補巻一。

〈オプシヨン一〇三〉という愛称とか通称があったが、本体上には全く記載されておらず、あれは一体何だったのか、謎だ。(ちなみに、同時期の集英社版世界文学全集も「ペラージュ」と呼ばれていたが、こちらは帯にだけ記載がある。共に書誌研究者泣かせの困りものである)。

シェイクスピア三巻、ゲーテ二巻、トルストイ、ドストエフスキーは共に各六巻など、古典作家に些か手厚過ぎるアンバランスさがあるもの(ロマン・ロラン三巻、デュマ二巻、パール・バック二巻、ジョージ・エリオット二巻などは、作品自体が長いので止むを得まい)、従来顧慮されることの少なかったロマン派系のノヴァーリス、ネルヴァル、新しい所でロートレアモン、バタイユ、ベールイ、ツアラ、ムーシル、ベロー、サリンジャーなどが加わっている。ただ、前述の如く長大巻に押されて、抱き合わせが多く、隅に押しやられた印象は拭えない。もう少し、構成の仕様があつたらうに、とは

思うが、独自のラインナップと嵩張らない所から人気は高い。

「集英社ギャラリー世界の文学」(六〇年代)は、巻数こそ少ないものの、一冊当たり千頁を超える厚冊と山本容子のお洒落な装丁で記憶される。同社既存全集の再構成といった印象は拭えないが、各国別に構成し直し、フランスの良い編纂で、例えばフランス巻など、ラファイエット夫人、プレヴォから始まって、ラルヴオー、ラディゲ、コクトー、シモン、ジュネ、ロブールグリエまでを三巻に収める。ドイツも、グラス、ロート、ノサック、イギリスは特に進境著しく、ゴールディング、シリトーは順当として、ゴードイマー、アトウッド、カズオ・イシグロまで入っている。ラテン・アメリカ巻が単独になっているのも同社らしく、ボルヘス、ドノソ、ガルシア・マルケス辺りはいいとして、オカンボ、ルルフォ、アタナシウなど聞いたこともないような作家も多い。

鳥取あれこれ その七十一

内田 克彦

(地域研究家)

(承前)

「摂海御台場」とくれば、昨年の大河ドラマ『晴天を衝け』で、折田要蔵役を演じていた徳井優が「摂海防御御台場築造御用掛」と連呼していたの思い出す。

安場は、六月に「摂海御台場御用」に就いたのであるが、七月には、軍艦奉行から、翻訳方への出勤の督促が来たため、今しばらく待つて欲しい旨回答している。

元治元年は、長州藩兵の上京を巡って鳥取藩でもその対応に紛糾し、東館九代池田仲立が、慶徳の名代として京都御所守衛のために率兵上京することは長州藩と「兵刃を相交へ候」ことになるとして、六月二七日に自害する事態となった。

そして、七月一九日、長州藩が「禁門の変」を起こす。そのときは、鳥取藩兵は幕命により上賀茂警衛をすることになっていたのである。

さらに、九月五日夜、長州藩寄りの鳥取藩士二名がこの件で出兵やむなしの態度を取っていた御目付の堀庄次郎を

帰鳥していた自宅でのテロにより殺害している。

九月六日、安場は神戸へ滞在中の勝を訪問している。『勝海舟日記』によると、「安場敬之丞大坂より来ると書かれているのみで、「人名に関する注」欄は、空白である。「解説」には、「編集者の力不足でとくに諸藩士については不明な箇所が多く残った」と釈明の記述がある。

翌日には、安場は「長州へ御出勢の御供を仰せ付けられる」とある。仰せ付けられたのは、誰の「御供」なのかよくわからない。「長州へ御出勢」が「第一次」長州征伐であるとするれば、鳥取藩が出兵を命じられたのは七月であり、実際に出発したのは一〇月二六日である。

次いで、安場は、前年勝が提案し、この年五月に発足した「神戸表御軍艦操練所」の砲術教授方出役を一〇月時点で仰せ付けられており、加えて時期は不明だが、翻訳方出役を仰せ付けられており、この操練所が廃止となった慶応元年四月、江戸に行つて残務整理の後、七月に江戸を立つて、八月一八日、鳥取に帰つて来る。

慶応二年二月、「頭重強く、難儀致すに付、惣髪を願出、許される」とあり、安場に病気の兆候が現れる。

とはいえ、八月に「御徒大砲小銃歩兵教導」を仰せ付けられ、九月には学校においての「大小銃手続足並等稽古取立」を仰せ付けられ、十一月には「足軽并歩兵師範役」を仰せ付けられる。その演習時に使用したと思われる本に『散兵定則』、『練卒定則』、『小隊訓練 安場演習場』がある。

『鳥取県史第3巻 近世政治』には、次の記述がある。

文久二年以後、慶応三年末にいたるまで、安場敬之丞の活躍は目ざましかった。「中略」慶応二年夏、第二次長州征伐の敗戦後、藩内で兵制改革が積極的に進められるようになる、安場の活躍は一層目ざましくなった。

しかしながら、慶応三年一〇月に、「砲兵頭支配大砲小銃取立」を、一二月には「足軽歩兵師範役」を、御免となる。そのことについて、前掲『鳥取県史』では、続けて次のように記述している。

幕府軍制に深く関与することのあった安場敬之丞は、幕府に通じているかもしれないという嫌疑をかけられて、藩の公務を解任されたものと推定される。

実は、安場は、明治二年五月七日付けで「病気の処、養生

相叶わず、今晩、死去致す」と届けられているのである。安場の表舞台からの退場は、病気のせいだったのである。

ところで、磯田道史氏が、今年の『月刊歴史街道』(PHP研究所)3月号に、「明治新政府の真実」と題して「鳥羽伏見の戦い」について、次のように記述している。

こうして、主演・薩摩、助演・長州に加えて、脇役・土佐の三者が、討幕の舞台上上がった。

さらに因幡藩(鳥取藩)も加え、「薩長土因」で新政府軍の主力を構成したが、実は討幕勢力が、さらなる「脇役」として喉から手が出るほど欲しかったのは、「肥」の佐賀藩だった。

確かに、「鳥羽伏見の戦い」では、鳥取藩は他藩に先駆て薩長側に付いて参戦したのであるが、文久年間には、既に「薩長土因」としてその動向が注目されていた藩であり、その後の慶徳不在下の京都においても鳥取藩士の「周旋」によりその動向が注目されていた藩であり、今後研究が進み、それらの史実がさらに深められることを願っている。

(一)の項、了)

二〇二二、六、二五

八代日記 (二十八)

齊藤 仁昭

元長崎書店

五月末日

氷室祭がやってきた。昨年と一昨年はコロナ禍により御参りも中止されていたがついに復活。焼き鳥やお面やたこ焼きなどの屋台も境内に20軒以上出ていたようだ。

僕らは肅々と雪もちを作りつつけて店に運んでは。パツク詰めて売り出した。早朝からお祭りのピークの23時台までその繰り返し。売り切れたあとは翌日の分の前作業。よく働いた。雪もちはかなり重量があるので自分はいちどに番重3段分までしか持てないほどで、結構腰にダメージがきた。地元の人々も久しぶりの氷室祭で楽しそうにしているよかった。

よかつたのだが製造の人手不足には難儀して、結局ワイフとその友人にまでバイト代を出して手伝いにかけてもらうことになってしまった。来年はもっと大変だろうなと思う。そしてしかし人手不足ってどこでも深刻なのだろうなというのはわかるが、労働力を買い叩くようなことには加担したくない。そんなこと言うのは甘いのかなー。

六月某日

高木元『東京 IN THE FLESH』(イーストプレス)をチラチラ読む。ヤン富田との対談が面白すぎて、そこを消化できるまでは例によって先に進めそうにはないかなと思っただけど他のところも面白いものだから一気に読むしかない。ロックの感じって今あんまりかっこいいとは思われないのかもだけど、常にフレッシュであることを忘れないことが大事。

六月某日

人間は神の創造物かもしれないが、神もまた人間の創造物。もしくは神は人間の創造物であるだろうが、人間もまた神の創造物。などと書いたメモを見つける。何を思ったのか。

六月某日

いいバンドとは、距離・時間・速度の伸び縮みが自由自在であるバンド。レッドツェッペリンのライブ音源聴いて思った。ケバブジョンソンも時間は伸び縮みしているのだけれどそれはまだ走るもしくはモタるの領域。

六月某日

『映画・フィッシュマンズ』を鑑賞。色々な感情になってしまったけれど、佐藤伸治の歌は本当にすごいというのとバンドの演奏がすごいというのがいちばんの感想。曲と歌詞と声の力強いこと。そしてベースがやっぱりずっとやばい。熊本のライブハウスで一度だけライブを見たことがある。五人とも集中力がすごかった。あと、忌野清志郎の影響はかなり大きかったとを感じるのだけれど実際のところはどんなんだろうか。

六月某日

こどもがしまじろうの出でくる映像とか本をたまに見ているので横からチラチラ僕も見ているのだけれど、しまじろうはなんだかとても良い子、もしくは良い子を演じていて、かつ潔癖な感じがして、こ二十二年ばかりの子どもの教育へ良い影響を与えているとは全く思えず、じわじわと陰惨な気持ちになってしまふ。しまじろうの両親とか妹、ともだちたちもそんな感じで、良い子で潔癖でルールを守って、家族や道徳を信じていることが当然と思うような輪に小さい頃の自分は入れなかっただろうから辛くなる。そしてさらに、そういう輪に溶け込めるようにしてあげるのが親なので

は？と言う圧力も感じてしまいあの人のふりをした虎やら鳥やら兎たちを呪わずにはいられない。穿ちすぎだろうか。

教育学部を出たにも関わらず、どういう教育が自分の子や他の子のためになるのだろうか、答えをもたない。せめてゆっくり絵本でも読んでやりたいが子どもが起きる前にすでに会社におり、帰宅する頃には疲れ切つてしまい何もしてあげられない。自分の労働している間に子の面倒を見てくださっている保育園にはいくら感謝してもしきれない。休みの日に恐竜博物館に連れて行ったりするけれど、結局売店で恐竜のフィギュアを買ってくれと駄々こねられることにイライラするだけの始末。

六月某日

猛烈な土砂降り。短時間で大量に降ったことで側溝から水が溢れている。高校生の頃、雨が降ったときは自転車通学が億劫だったので休んでいた。休むたびに南の島のハメハメハ大王の歌を思い出していたが歌の陽気さとは裏腹に気分は憂鬱だった。風が吹いたら遅刻して、雨が降ったらお休みで。これくらい感じて世の中動いていかなかな。

トルストイ翁の涙に…

秦阜 梅林

(楽人)

チャイコフスキーの小品※中最もポピュラーなものの一つに「アンダンテ・カンタービレ」がある。此れを聴き文豪トルストイ翁が涙を流したと云うのはつとに有名なエピソードであるが…

一

つひ最近SNSのニュースで、これは「チャイコフスキーがウクライナの民謡を聞き作ったメロディ」だから！と云ふ事が伝へられていたけれども、其の儘では些か正確とは云へなひだらう。

二

いったひ此の旋律には字余り、字足らずの混合拍子が自然にしかし微妙に入り組んでゐて、ちよつと聴くと妙ちくくりん、かなりユニークなモノである。学童時代、僕は幼ひ弟と一緒に、レコードやラヂオから聴こへて来る「一寸変ニテコ

な」此の旋律に合はせ「タリタラタラ〜ラ〜、タ〜タラタララ〜
〜月」大声で歌ひ(此処で爆笑し)乍ら「えいこお〜ら〜、
タ〜ラリラララ〜」と俄かに腰を入れ魯を漕ぎすつかり日本語の舟唄にして了つて居たものだが、残念乍ら其れも勿論誤り…。

三

凡そチャイコフスキーは、ウクライナやベラルーシ、クリミア半島やウラル、ポーランドに至るまで各地の民謡や舞踊を自作に盛り込むと云ふ事を意識、無意識を問はず頻繁、積極的に行つた本来國民主義的な作曲家である(しかし当時ロシア楽壇では「五人組」等近視眼的な国粹主義者達から彼は「欧州かぶれ」とスノッブなレッテルを貼られてゐたのだが)反面と云ふか、並行して敬虔な教徒として、生活の中に溶け込んでゐる(ロシア正教の)聖歌や宗教音楽(教義に則り祈祷を声に出す信仰告白、その実践としての音楽)にも真摯に打ち込んで居た(尤も此方も、深意に於ひては「國民主義」的なのであり、単に聖・俗併せての試みに過ぎなひ)事実は余り知られてゐなひけれどそんな創作態度は、後継の汎浪漫主義者ラフマーニノフや、シニカルなプロコフィエフ、そしてなんとストラヴィンスキーに至る迄影響を与へ受け継がれてゆく…広義ロシアの後輩

達は皆、先駆者のかうして苦心し切り開いた道を易々と往つたものだ。

IV

冒頭の話に還つて…「アンダンテ…」では、単にウクライナ土着の民謡(作曲家実妹の嫁ぎ先ダヴィドフ家領地のあるウクライナ、カメンカで聴いた旋律)が高らかに謳はれてゐる許りではない。その生き生きとして素朴な調べが正教の荘嚴、敬虔な調べや書式、更に一般的な西欧の宗教音楽が幾世紀もかけて培ひ洗練を極めてきた厳格様式と共振し乍ら更に、チャイコフスキーの「普段のフレーズ」も伴つてやがて平和を齎らす鐘の鳴り響く内に溶け合ひ、さながら虹のやう、祈りの内に飮してゆく(アーメン!)と型通り結ぶ)様、其の見事に翁もきつと涙を零したに違ひないのである。其れはつぶぎにスコアを調べなくても一聴して解るシンプルで鮮やかな…祈りの声、飾らない気高ひ志こそがきうして民謡、聖歌等の単体ではなくそれらを束たコーリジユが「民族の声」としてかの翁の心を打つたのだと僕は思つてゐる…。

20220610

※此の曲は本来、独立した「小品」では無く弦楽四重奏曲の一つの楽章・有名になつてC bの声部を加へた弦楽(五部)オーケストラの小品として亦更に色々な形に編曲されポピュラーになった。

P. I. チャイコフスキー

弦楽四重奏曲第一番ニ長調作品二(1871)

(第二楽章アンダンテ・カンタービレ)

① プラハSQ(rec1968 プラハ) ② ケラーQ(rec 1991)

③ アマデウスQ(rec1979 ミュンヘン) ④ レナーQ(第

二楽章のみ) 30s ⑤ ボロディンq(rec.1994 ヘルリン)



(イラスト・秦阜梅林)

人のもとに帰るしかない

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

「こ数年、私と知り合った人というのは、私のことをどう思っているのだろう。」

初めて知り合った人とも話せるし、教師という仕事をしているくらいだから、人前に立って話すことも苦労しない。とつつきやすいようなふりをしている。だからこそ、よく忘れてしまうのだが、実は人と仲良くするのが苦手だ。重度ではないけれど、ちよっとした「人間嫌い」だ。そもそも、本好きになったのも、人と仲良くできずに、本に逃げ込んでいたから。独りで時間を潰すには便利なものだった。今、こうやってなんとか知らない人とも話せるようになったのは、そうでもないし知らない土地ではやっていけないから、職業人として無力になってしまふからと適応したせいかもしれない。それでも、仲良くなるのが上手い人——私の弟のように、初対面の人とも肩を組めるような人——には全

く敵わない。人と会話した後、あんなこと言ってよかったのかとよく反省してしまう。

そもそも、「人間」というくらいだから、人と人との間に流れる空気に耐えられない時がある。この人がこう思っている、あの人はそれに苛立っている。そんな心の動きを読んではいたたまれなくなる。いたたまれなくなるくらいなら、あまり深く関わりたくないもので、人と人の間に挟まれるくらいなら距離を取りたい。

「心のあるカメラになりたい」と思春期の頃思っていた。自分の一挙手一投足が世界に影響を与えてしまうくらいなら、与えない存在になればいいのにと。それでも人のことをぞいて見て、「人間って面白いものだな」と思っていたいから、せめて心と自分の目だけは残しておきたいなどと感傷的な夢を持っていた。

と言ってもそんな風には生きてはいけない。覗き見をしたいなら、ある程度自分の手と足で動いていくことを、誰かに触れてしまうことを、人を不機嫌にさせることを、受け入れなくてははいけない。

自分の身体性にはとほと嫌気がさしたのは、前の仕事をしていた時。芸能事務所現場マネージャーの仕事をしてい

ると、自分の体の置き場が本当に難しい。撮影にいらなくてはいならないようで、いなくてもいい。かといって、全くいないと困る。そんな風な仕事で、空気のように振る舞わなくてはいけなかった。だが、残念ながら、私は人なので、体も声もあって、そのうえ、不器用なものだから、何度も邪魔になってしまう。「もっと空気みたいになればいいのに」と心の底から悩んでいるうちに、やめてしまった。

それに、人と関わる仕事なので、色々な感情と対峙する羽目にもなる。この人でうまく行っても、ある人では全くうまく行かないということもある。「全然大丈夫」の意味が人によっても違う。仕事の成果はわかりやすいものにはなりにくい。なら、もっと心穏やかに過ごしたいとも思っていた。

が、結局のところ、私は教師という仕事を選んでしまった。毎日、思春期の荒波のような素朴な感情の変化を目の前にしている。人のことを眺めていたいと思う欲が私の元から消えることはなく、仕事を選ぶうちに、人を目の前にする仕事を自ずと選んでしまう。

私は、人のもとに帰るしかない。

ひとり孤独に世をはかなんで生きるには、早すぎるのだろうか。山奥でひとり暮らしている自分などは想像できない

い。——そんな環境の方が結局周りの人を頼る力が必要にもなる。——都会で、ずっとパソコンに向かって仕事をしたりする自分も想像できない。それなら少しでも人の姿を見て、人の変化を見て一日の大半を過ごしたいと思ってしまう。結果的に、それが仕事選びに影響してしまう。

どんなに面倒でしがらみのように感じられても、その渦の中に引き寄せられていく。「人間」の中に入っていくしかない自分がいる。それは「人間」の中で、心かき乱されるような時間が苦手なようで、好きなどころがあるせいだろう。時にはしがらみにも呪いにもなるつながりの中で、私たちは自分達が人であることを感じられるのかもしれない。

人と人との関わりを眺める。自分の心が動く。本当はそれだけでいい。だが、自分は体を持って生きている。ならば、それで動いた自分の手足が与えてしまう影響も、少しずつ受け入れるしかない。それが生きるということだから。

そうやって、「人のもとに帰るしかない」と私は決意して生きていく。

そうめん

あきの素生

(くうねるめがね)



久しぶりに車で長めの距離を走った。身の丈に合わない速度でびゅうびゅうと景色が過ぎ去っていく。いつだって何らかの景色の中に身を置いている。でも、十メートル、百メートル、一キロメートル、あつという間に進む速さが視界を広げ、景色の存在を大きく強くする。その中を行く小さな自分の存在は、少し痛快ですらある。車で走るのが苦にならないのは、そんな理由からかもしれない。

一人で車を運転するときでできることと言えば、歌うか考えるか。といって、もちろん熟考するわけにはいかない。とぎとぎ思い出したように、頭の表面をすすると、いくつかの考えがすべっていく。変わっていく景色に呼応するように浮かんでは消え、忘れ去るものもあれば、また浮かんでくるものもあつたりして。運転時間が長くなればなるほど、歌も考えもなくなつて、ただ目的地を目指すだけになる。その感覚を思い出した。

そうめんの消費量が増える季節だ。にゅうめんも好きなので、一年中食べてはいるが、夏はやっぱり格別だ。例年、六月は少し肌寒く感じる日があるので、こたつをしまうのを少し躊躇したくらいだが、さすがに五月中にはこたつをしまった。しまつてよかつた。例年になく、暑い暑い六月だった。すっかり口がそうめんになつている。

ここ何年か、よく作る混ぜそうめんがある。炒めて塩胡椒で味付けしたひき肉と、枝豆、粉チーズ、オリブオイル、レモン汁。これをそうめん混ぜる。ひやむぎでもいいかもしれない。細くてつるつるした麺によく合う。お好みで黒こしょう。ひき肉を買い、枝豆が家があれば、必ずと言つていいほど作る。いろんな混ぜそうめんのレシピがネットニュースで流れてくる。イタリアン風、エスニック風、きつとおいしいのだろう。でも、たつたひとつ覚えたこの混ぜそうめんが気に入つて、こればかり作つている。冷やしそうめんは、暑くて食欲がないとき、料理を作りたいくないときの味方だ。あまりの暑さでそうめんを茹でるお湯を沸かすのも辛いときは、温暖化で夏の定番料理が脅かされている等とばやきながら耐えている。茹でたそうめんをざるにあけて、流水でしっかりと洗う。水にさわるのが気持ちよく、必要以上に洗つてしまう。

めんつゆは、自分好みの濃さに調節できるのがいい。

味の濃いものは苦手なので、氷水を多めに入れる。氷水は計量カップで作る。きちんと水の量をはかるためでなく、注ぎやすいから使っている。カップのまわりに付いている水滴、氷がプラスチックと鳴らすカラコロという素朴な音が、夏の日常の記憶として刷り込まれている。つゆにキムチや食べるラー油を入れていた時期もあったが、今では薬味は刻んだねぎとみょうが、生姜とスタンダードなものだけ。梅干しを入れるときもある。

そうめんの袋には、一人分何束、と書いてあるが、冷やしそうめんだと、袋に書いてある量では足りない。冷たい麺は飲み物のように喉をとおっていく。食べ終わる頃には、つゆがそうめんの水気と溶けた氷で、それはそれは薄くなっているのだが、そのタイミングでめんつゆを足すのものはぼかられて、心なしか塩味の感じられる水っぽい麺をすすっている。そうめんはいつまでも食べられそうだから、自分を諦めさせるにはちょうどいい食べ方かもしれない。

ふと思いついたが、子どもの頃、長い竹の樋を使った流しそうめんの催しに連れて行ってもらったことがある。まだ真夏でも気温が三十度を超えることが稀な頃、エアコンの要らない祖母の家近くの木々に囲まれた場所。記憶の中では、すべり台を二倍にも三倍にもした高さからそうめんが流されて、子どもたちは下の方で、箸を持って待ち構え

ている。日の届かない木立の中、竹を流れる水と白いそうめんが涼やかで、それを喜ぶ気持ちと蚊への警戒が、今は夏なのだと感じさせた。

車を運転してから数日後、久しぶりに、長めの距離を歩いた。身の丈に合った速度で、道端の草やら雲の形やらを眺めながらてくてく歩く。梅雨がどこかに行ってしまったような暑さに、慎重に歩を進める。くちなしがふつと香る。実家のくちなしを思い出す。飛行機がはるか頭上を追い抜いていく。音も聞こえないほどの高さを行く。置いていかれるような気がするから、なんだか切なくなるのだろうか。

(イラスト あきの素生)





・編集後記・

間近でアンドロイドを見る機会がありました。ミライ的！
かつて「スター・トレック」シリーズに登場するアンドロイド
に本気で憧れた頃を思い出しました。

ドラメリア（編集長）

推し本。高村友也『スモールハウス』ちくま文庫のその後を
語る『存在消滅』青土社という本ができました。独特な死生観に
基づくシンプルな生活。ついに小屋は2畳にまで縮んで行くよ
うです。

奈良敏行（発行人）